

弁護士の目でみる「映画評論」その3

弁護

士 坂 和 章 平

「『プライベート・ライアン』と『梟の城』に見る「公と私」」

平成一二年四月二日小淵総理が脳こうそくで突然倒れ、緊急入院。四月四日、在任六一五日で小淵内閣は総辞職し、森内閣が出現した。「沖縄サミット前の衆議院解散・総選挙（六月某日）は必至」と言われているため、本稿が出版された時には、既に国民の審判が下され、日本の政治状況が大きく変わっている可能性もある。

「経済再生内閣」としてスタートした小淵内閣は、平成一一年一〇月「経済再生の次は教育改革」とぶちあげた。小淵総理は、平成一二年三月私的諮問機関「教育改革国民会議」を発足させるとともに、町村元文部大臣を教育改革担当の首相補佐官に任命し、その意気込みを示した。教育改革における検討テーマは「結果の平等」から「機会の平等」への転換など多岐にわたるが、その根本には「公と私」のバランスの問題がある。つまり「個人の権利や自由を主張するだけでなく公共の福祉とのバランスをとるべき。戦前が『公』に傾き過ぎたとするならば、現在は『個』に傾き過ぎている。『公』と『個』のバランスを取っていくべきだ」という問題意識だ。

戦後五五年、いよいよ二一世紀に踏み出そうとしている今、憲法調査会の設置に見られるように憲法改正も具体的な課題となっており、「公と私」の検討は最も大切なテーマになっている。そんな問題意識を持ち「自己責任」というキーワードからみて、すごく面白かった映画が『プライベート・ライアン』と『梟の城』である。

* * * * *

『プライベート・ライアン』は平成一〇年九月封切られたスティーブン・スピルバーグ監督の戦争映画。第二次世界大戦での連合軍のノルマンディ上陸作戦を背景としながら、ライアン二等兵の生き方に焦点をあてて描いている。冒頭約二〇分間の戦闘場面はものすごい迫力。これで観客の度肝を抜き、後は極めて人間的なストーリーに移行するという「つくり」になっている。物語はこうだ。

『レインメーカー』の主役でもあったマット・デイモン演ずるライアン二等兵は四人兄弟の末っ子で、兄弟も全員兵士。ライアンは上陸作戦に従軍していたが、三人の兄たちは他の戦場で全員戦死した。母がそれを知り嘆き悲しんでいることがアメリカ大統領の耳に入り、大統領は「四人の兄弟全員を戦死させるわけにはいかない。ライアンは母の元へ帰らせる」と命令。そこでライアンを戦場から連れ戻す任務のため、八名の特殊部隊が編成され戦場に向かった。その隊長は、今年のアカデミー作品賞にノミネートされた『グリーンマイル』で感動的な演技を見せたトム・ハンクス。連れ戻すために戦場へ行くのは当然命がけ。苦勞に苦勞を重ねてやっとライアンを戦場で探しあて、「戦闘任務を離脱して後方へ戻れ」と命令を伝えるが、ライアンは「今一緒に戦っている仲間を残して、自分一人帰ることはできない」と命令を拒否した。

* * * * *

軍隊の中にいる限り、内容如何にかかわらず命令は絶対服従すべきものだ。ところがライアンは命令に違反して、「僕は戻らない。作戦が成功するまでここで頑張る」と言ってそこに残ったのである。この行為をどう評価すべきか。すなわち、命令違反・規律違反として非難すべきか、それとも主体性の発露あるいは他律的な共同体のための行動として積極的に評価すべきか。これは「公と私」あるいは「自己責任」という観点から、非常に興味深いテーマである。

甲子園短期大学学長の加地伸行先生は「ライアン二等兵のみごとな命令拒否は、欧米の個人主義すなわち自律し自立し自己責任にもとづいて行動の自由を選ぶ生き方そのものである」と分析する（平成一〇年一〇月一四日付産経新聞「正論」）が、私は全く同感だ。戦後五五年の平和を享受した今日の日本は「平和ボケ」が進み、尊重すべき個人主義は自己責任を伴わない「孤人主義」「排他主義」となり、「利己主義」が横行している。満席の映画館の中、絶えずポップコーンをポリポリと食べ続けていた日本の若者は、果たしてライアン二等兵になれるのだろうか。心配なしとしない。映画の戦闘場面の迫力にのみ目を向けるのではなく、ライアン二等兵があの場合のように意思決定する姿を、日本の若者は自分の身におきかえてじっくりと考えるべきだ。

教育改革に必要な視点は、現在まかり通っている多くの「建前論」ではなく、まさにライアン二等兵の生き方そのものにある。

* * * * *

自己責任というテーマで『プライベート・ライアン』と共通する映画が、平成一一年一〇月公開された『梟の城』だ。この原作は司馬遼太郎のデビュー作で、第四回直木賞の受賞作。主人公は中井貴一演じる葛籠重蔵（つづら・じゅうぞう）という伊賀忍者であり、重蔵に対置される人物は重蔵の幼なじみの腕利きの忍者、風間五平（かざま・ごへい）である。物語は次のように展開する。

織田信長は「伊賀の忍者集団は生かしておくとならぬ邪魔だ。伊賀の里を焼き尽くせ。女子供も皆殺しにしろ」と命令し実行した。もともと皆殺しといっても、当然生き残りがいた。重蔵や五平はその生き残りの一人。そして重蔵は、生き残り組のボスから「信長は死んだが、秀吉が信長の遺志を継いだ天下人だ。秀吉を殺せ」という命令を受ける。無為の生活を送っていた重蔵は、信長への怨念を秀吉に重ね合わせてこの任務を引き受け、秀吉を殺すという新たな目的のため活動を開始する。秀吉を殺すため情報を収集し、敵と戦う。そして伏見城に忍び込むことに成功した。

重蔵は秀吉の寝所に入り、「おまえが秀吉か。俺はお前を殺しに来たんだ」と二人きりで話をする。そこで秀吉は「こんな老人を殺してどうなるのか。わしがすべての権力を握って日本を動かしたり、朝鮮を攻めていると思ったら大まちがいだ。人間は誰でも従わざるを得ない運命・役割がある。朝鮮を攻めろという声が強くなれば、天下人としてのわしは行けと命令せざるを得ない。世の声がわしをそうさせているのだ。わしの命を奪っても世の中の流れは変わらない」と重蔵に語りかける。目の前にいるのはまぎれもない「太閤殿下秀吉」だが、二人だけで話をしていると、重蔵はなぜ自分がこのひ弱な老人を殺さなければならないのかわからなくなった。

確かに殺せという命令があるのだから殺さなければならない。だがこんな老人を殺して何の意味があるのか。ここで殺しても目的達成感を得て満足できるわけでもない。この老人を殺すために、不眠不休で命がけの努力を続けてきたのかと思うとバカバカしい。そこで重蔵は命令を無視。「自己判断」として「もう、やめた」と決断する。置きみやげとして、秀吉の顔に一発パンチを見舞った後、命をかけて伏見城から脱出しようとする。

他方、五平は逆の立場で雇われている。五平は重蔵と同様に有能な忍者だが、組織に忠実な人間。五平は重蔵を捕えろという命令に従って、伏見城から逃走する重蔵と闘う。以下ストーリーは中略。結局五平は、天下の大泥棒「石川五右衛門」と誤認され、最終的に釜ゆでの刑で死んでしまう。

* * * * *

『梟の城』は、五平という人物を対置させることによって、重蔵の人物像をより鮮明に浮かび上がらせることに成功した。つまり重蔵という忍者は、組織の一員であり上司を頂いてはいるものの、自分の目的をしっかりと持ち自己責任で動いていたということだ。

もっともこれは悪く言えば「自分がやりたいからやる。命令されてもやりたくないことはやらない」ということだから「わがまま」との見方もある。しかし私は重蔵の行動は「わがまま」ではなく、自律した自我を前提として、自己判断をし、自己責任をとった行動だと確信している。つまり重蔵は、自分の目で秀吉を見て、この老人を殺すことに意味はないと自己判断したから、自己責任をもって命令を無視したのである。

一方のライバル五平は、上から命令されたことはきちんとやる、その命令の是非については自己判断をしない、命令をひたすら実行するしか能がない、それをやるのが自分の仕事だと考え、それ以外の生き方は自分では見つけられない、こういう人物像だ。その結果、五平の「公と私」のバランスは片寄り、自己責任もとれないことになり、結局は無念の死を遂げてしまった。

戦後五五年の間、日本では中央官僚を中心とした「五平タイプ」の有能な人材は多数輩出したが、決定的に不足しているのが「重蔵タイプ」の人材だ。教育改革を論ずるには、このような視点からの「自律性」や「自己責任」の検討が不可欠だ。

* * * * *

教育改革国民会議の初会合は、平成一二年三月二七日に開かれ、一年以内に教育改革の青写真を描く役割を担っている。二四人の委員が一人ずつ述べた問題意識は既に新聞で公表された。これらの切り口はそれなりに評価できるものの、最終答申として「官僚の作文」を完成させても無意味だ。

そこでたとえば、国民会議の席でこの二つの映画を上映して議論するとともに、インターネットのホームページを開いてライアン二等兵の生き方と重蔵の生き方について日本の若者の意見を求めてみてはどうだろうか。教育改革を論ずるについて、あなたがち突拍子もない提案でもないだろうと思う。